

アトリエ 琉游舎 だより 228号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

2026年4月8日日発行

みほとけに産湯かけたかホトギス
天上天下たったひと声

四方赤良

- 4月8日はお釈迦さまの誕生日と言われる日です。この日を祝って行なわれる仏教行事は、花祭りや灌仏会、降誕祭と呼ばれています。お釈迦様は誕生後すぐに七歩歩き、右手で天を、左手で地を指し「天上天下唯我独尊」と唱えたと伝えられています。お釈迦さまが生まれたこの日に、天から甘い雨が降ったという言い伝えに由来して、甘茶をかける習慣があります。
- 狂歌は和歌の形式を用いて、世の中の出来事や人間模様を滑稽、皮肉、ユーモアを交えて表現した「笑いの短歌」とも呼ぶべきものです。「笑い」は、日本ではあまり高尚でない、一段低い表現と思われがちですが、この蜀山人大田南畝先生（狂歌師名は四方赤良）の技巧を凝らしたユーモアと風情のある狂歌は、芸術的とも言える職人技の文学です。
- 狂歌を解体して分析し、その技巧とユーモアを解説することは、野暮の極みかもしれません。読んだままに人知れずほくそ笑むのが粋というものでしょうが、作者の意図を理解するには文章を分析することからと学んだ習性に従って、この狂歌のおかしみを解説してみます。
- ホトギスの鳴き声はしばしば「テッペンカケタカ」と聞こえます。お釈迦さまが降誕時に発したとされる「天上天下唯我独尊」の姿に、産湯を想定してかける甘茶に合わせて、ホトギスが一声。「産湯てっぺんにかけたかぁ」とお釈迦さまの誕生を祝う鳴き声でした。
- やはり解説は野暮ですね。言葉の分析は理屈で理解することになってしまい、読んだ瞬間のおかしさ、技、作者の眼差し、感動などのあらゆる感覚が言葉で拡散してしまうようです。
- お釈迦さまの産声、「天上天下唯我独尊」も文字通り解説すると「この世で自分（釈迦）が最も尊い」となるのですが、彼は仏ではなく人として生まれてきたと言うことが重要です。「私も（釈迦）あなたも、天上天下に誰とも代わることのできない一人として、何一つ加える必要もなくうまれてきた。そのありのままのいのちが、唯一尊い」と。4月8日はいのちを持つ各々が、それぞれのいのちの尊さをあらためて知る日でありたいと思います。

写経会 5/3 (日) 13時半 読書会 4/14・4/28 (火) 13時半

狂言綺語…擬死(カミとホトケの出会いⅧ)

いつもならば早朝から、騒々しく箱罾で暴れる音に眠りが覚されてしまうのですが、今回は様子が違いました。冬の間は猪も活性が鈍るのか、人目につくところに出没することは殆どありません。我が家の前の山林に仕掛けられた箱罾にも、真冬の間は猪がかかることはありません。例年だとウグイスが鳴き始める三月になるとそろそろ猪が箱罾にかかる頃だと、妻と話していました。そのまま一向に猪が箱罾で暴れる音を聞くことができないでいた三月半ばの朝、散歩に出て何気なく罾の方を見ると、天井に黒い塊がなにやらみえています。そばに寄ってみると、天井に逆さになった焦げ茶色の獣がへばりついていたのでした。そばに寄ってみてもぴくりともしません。罾の入口は開いたままです。死んでいるならば落下してしまうはずですが、四本の足は仰向けになりながらしっかり鉄の柵を握っています。でも全く反応しません。気味が悪いのでそのまま立ち去り一時間の散歩に出ましたが、戻ってきてはまだ同じ格好のままぶらさがっていました。

いつもならば、Wi-Fiで映像が猟友会の方の所に届き、既に猪の回収は終わっているはずなのに、9時過ぎになっても天井の黒い塊はそのままです。猟友会の方に電話をしてみると「承知しています。狸が逃げられるように扉は開けてあるので、いずれいなくなるでしょう。今、棒でつつくと暴れますよ」とのお答えでした。確かに、30分後に確認しに行くと、黒い塊は跡形もなく消えてなくなっていました。早速AIに「狸の死んだふり」と聞いてみたところ、狸は擬死状態にあったとの回答がありました。擬死は動物が外敵に襲われた際などに、死んだように動かなくなる防御行動を指し、これは意識的な「死んだふり」ではなく、刺激に対する反射的な不動状態とのこと。擬死は、昆虫から哺乳類まで幅広い動物に見られる現象で、体温や心拍数、呼吸数が低下し筋肉が硬直することもあるようです。なぜ擬死となるのかは、捕食者から逃れるための生存戦略なのです。捕食者は被食者が急に動かなくなると力を緩める傾向があり、このような時に捕食者から逃避できる可能性が生まれ、捕食を免れる可能性が高まり、また、無理に抵抗して身体を損傷するリスクを避ける効果もあるとのこと。これは「逃げる」「戦う」以外に生き物が持つ効果的な生存戦略なのです。

罾にかかった擬死状態の狸に遭遇したことで、果たして人は擬死状態になるのだろうか、もしそうなならば、虎や熊に襲われたときに人は捕食を免れることができるのかと考えることを考えさせられました。実は「狸の死んだふり」のAI回答の末尾に、補足のように「狸の擬死状態は狸寝入りの語源になったと考えられる」とあったのです。狸寝入りならば私もしたことがあります。都合の悪いことを頼まれたときは、寝返りを打ったり、いびきをひときわ高くして狸寝入りを装ったものです。つまり寝たふりです。寝たふりをしていないことは先方も（たいてい妻か母）承知しているので「狸寝入りをしててもダメよ」の一声に起こされた風を装って洪々起き出すのです。お互い承知の上の猿芝居の一コマと思えばよいでしょう。ところが狸の擬死は狸寝入りの「寝たふり」のような意識的な行為ではなく、本能がなせる無意識の「死んだふり」です。逃げることも戦うことも叶わなかった弱者に、究極の選択として自然（カミ）が与えた生存能力です。弱者は生き抜くためならば意識すらも消し去ることができるのです。しかし人は全ての生き物の食物連鎖の頂点に立つ強者ですから、殆どの場合は捕食されることはなく、擬死を装う必要もありません。野獣に襲われる場合も彼らは捕食のためではなく、自身や子の身を守るための先制攻撃とみれば、しかるべき武器を持って防御し人は生き抜くことができるでしょう。恐怖で気絶することは擬死体験と呼ぶことができるかも知れませんが、しかし、意識がなくなっている間に捕食されるかも知れないとの恐怖が勝てば、おちおち気絶などできないはずで、人は他者に対して行なっていることは、他者も自分に対して行なうだろうと考える生き物です。ですから敵の前では気絶して相手に自分の身柄を委ねる（擬死）というような賭に出るよりも、抵抗や逃走、降参の判断をするはずで、人は本能よりも、経験によって獲得した智慧で生きる動物なのです。

死んだふりをして死を免れるならば、人同士の殺し合いは起こらないのではないのでしょうか。しかし実際の所、人は闘争を仕掛けられたら逃げるより抵抗や反撃を選ぶようです。逃げるとしても何処に逃げればよいのでしょうか。特に人の動きが全て空中から補足される現代に、一度捕食者から標的にされたら、逃げるところなどありません。降参しても復讐を恐れてそう簡単に降伏を受入れてはもらえないでしょう。その民族がもう二度と復讐という考えを起こさないほどに徹底的に痛めつけないと、安心できないのです。逃走も降参も根本的な解決にはなりません。ましてや擬死状態はとどめを刺されるだけです。人が争いで獲得した智慧は、闘争か逃走、服従か復讐が永遠に繰り返される智慧です。種の生存戦略の智慧でなく制圧のための智慧です。人間は他の生き物が本能で生きるのに対し、経験知を駆使して生き残ろうとする生き物なのです。

生存闘争の果てに得た智慧が、止むことのない人間同士の闘争へと駆り立てる智慧であるとするならば、このような智慧は一度初期化して人間が本能で生きる生き物であった時代に戻ることは可能だろうか、夢想せずにはいられません。あの箱罾に仰向けになってブラ下がっていた無抵抗な擬死狸を、誰が捕らえて亡き者にしようとするのでしょうか。この宇宙の中で（天上天下）誰とも代わることのできない一人として、何一つ加える必要もなくうまれてきたそのありのままのいのちが、誰であれ、何であれ、唯一尊い（唯我独尊）と思うことができるならば、生きようとしている生き物の、たとえそれが擬死状態でも、人はその命を奪うことはできないのではないのでしょうか。それぞれの唯一の命をありのままのいのちと知る智慧が、経験知に取って代わる慈悲の智慧となれば、命は奪うものではなく、互いの尊いいのちを唯一尊いと知ることができるでしょう。私はそれをカミ（自然）とホトケ（智慧）が出会うことで可能になると信じたいのです。